

E S 研（「教会と社会」研究会－中近世のヨーロッパ－）

第 20 回例会（2009 年 1 月 10 日）報告要旨

「中世後期バレンシア都市ハティバにおけるムスリム－国王ハイメ 1 世にみるバレンシア南部の征服－」

須田明博

本報告ではアラゴン連合国王ハイメ 1 世が 13 世紀のバレンシア征服でムスリムに対して降伏条約を中心とした征服をしたとする見解に関して、バレンシア南部に関してはそれがどこまで共通点を持っていたのか、また相違点を持っていたのかをバレンシア南部最大の都市ハティバのムスリムを対象として、ハイメ 1 世がどのような彼らにどのような措置を取ってきたのかを通じて明らかにしようとしたものである。

ハティバはバレンシアの南部と北部をつなぐ交通の要衝にあり、ムスリムとキリスト教徒の双方のもとで行政地域の中心を形成し、周囲には小城塞や町、村落などが点在していた。当時からハティバは地中海世界に広く紹介されており、12 世紀半ばに地理学者イドリーシーはシチリアにおいて、ハティバを“力強さと美しさで評判になった堂々たる街”と紹介している。ハティバの城塞はおそらくムワッヒド朝時代に強化されたと思われるが、その過程は考古学的には未だ解明されていない。近代以降もなお城塞としての機能を有し、近くはナポレオン戦争やスペイン内戦でも城塞として利用されたという。1238 年にハイメ 1 世がバレンシアの中心都市たるバレンシア市を征服しバレンシア中部までを手中に収めるに至り、また同年ハティバを支配するバヌー・イーサ家が臣従していたムルシアのイブン・フードが暗殺されたことによって後ろ盾を失ったハティバはハイメ 1 世の次の標的となった。

ハティバがハイメ 1 世に降伏したのはいつであるのかという問題は、降伏後にハティバのムスリム（いわゆるムデハル）をハイメ 1 世がどのように処遇していたのかという本報告の主題と、ハイメ 1 世のムスリムに対する降伏政策と照らし合わせる場合に、密接に関わってくる。

これまでの研究でハティバの降伏時期に関しては多くの研究者によって様々な仮説が立てられ、降伏の年代で最も早いとされたのが 1240 年、他にも 1248 年、1249 年、もっとも遅いもので 1251 年とばらつきがあるのだが、これは 1239 年からハティバが 3 回にわたってアラゴン王国の部隊に包囲されたことと無関係ではない。ハイメ 1 世の自伝『業績録』にもハティバ包囲に関する記述があるのだが、ここからは時系列的な関係が判明するものの直接の年代を特定しにくいという難点があった。

ハティバ降伏の年代がこのように諸説存在することになったのには、実は他にも理由があった。ハイメ 1 世はバレンシア北・中部でムスリムの支配地が降伏した際にムスリム住民に対して財産の保護、居住の自由の保障、イスラームの実践を認めていて、通常、軍事的征服からごく短い間に居住を認める *Carta-*

*puebla*と呼ばれる文書が作成されていたのだが、ハティバの場合 *Carta-puebla* が発給されたのは1252年の1月だった。そのため、ハティバの降伏は主に1240年代末以降と考えられてきたのである。この年代の特定には1991年にバルセローナのアラゴン王国文書館で発見された一枚の古文書(城塞の引き渡しについてラテン語とアラビア語で内容が併記され承認の署名が入っている)が大きな役割を果たし、ハティバが1244年に降伏したことが明らかにされたのである。

では、この時期ハティバにどれくらいムデハルが残留していたのだろうか。アル＝アンダルスにおいてキリスト教徒に征服されたムスリムがどのようにすべきかという問題に取り組んだのが15世紀のイスラム法学者、アル＝ワンシャリーシーで、彼のファトワ集(イスラームにおける個別事項に関する勧告)には異教徒に占領されたらその地を去るべきであるという見解が示されているという。こうした考え方が時代をさかのぼった13世紀当時においてどのくらい浸透していたかは不明だが、実際のところ、この時期にムデハルが移住するかどうかは当人の社会的経済的地位に大きく左右されていたようであり、経済的富裕層や知識人層はグラナダもしくは北アフリカへ移住する傾向があった。それでも1246年に城塞を割譲した直後にはムデハルの大規模な移住を示すような記述は見られず、征服後もハティバのムデハルに大きな変化はなかった状況が考えられるだろう。前領主であるアブー・バクルが引き続きハティバに居住していたことも要因として考えられる。

しかし、1247年になるとバレンシアでムデハル領主の反乱が発生した。バレンシアの有力都市であるハティバが積極的にこの反乱に荷担した証拠はないのだが、この時期からハティバにも大きな変化が見られるようになる。1247年12月にハイメ1世はバレンシア全土のムデハルに対する追放令を出し、続く1248年1月にはアブー・バクルがモンテサの城塞へと移されたという記述が残されている。こうして指導者であるアブー・バクルがハティバを離れたこともあり、ハティバのムデハルの移住が始まっていく。一方、この1248年と1249年の『分配記録』上にキリスト教徒入植者に対する土地財産の分配記述の増加が見られるのである。その中にはアブー・バクルの一族の土地を細分して分配した記録も見られ、旧支配体制の上層に属していた人々が所有していたハティバ周辺の土地が解体されはじめていたことを伺わせるであろう。

ハティバのキリスト教徒植民はなかなか固定しなかったようであるが、それでもこの時期のハティバではキリスト教徒人口が市街地では多数を占めるようになっていったようで、市街地だけでも家屋に関する分配記録が多数残されている。こうした市街地に住むキリスト教徒は近郊に与えられた土地で耕作を行い、ハティバから離れた場所に土地を与えられた入植者は、その近くの集落に住むムデハルを小作人として雇い、年に数度農作業のためにその土地へ赴くという農業形態を取っていたと考えられる。そして、ハティバの市街地に関して付言するのであれば、1248年以降キリスト教徒住民が増加していった結果、ハティバのムデハルはハティバ城壁の外側への移住を余儀なくされ、城壁外にラバルと呼ばれる居住区を形成していくのである。

ここでは1252年に至るまでに、ハティバ中の環境は短期間に大きく変化し、1252年の*Carta-puebla*は1248年以降にキリスト教徒が主導権をにぎりつつあったハティバの現状をハイメ1世が追認したものであったと言えるのではないだろうか。

一方でハティバに聖堂を建設するためバレンシア司教は1248年にこの地に土地を獲得し、続く1249年3月にはハイメ1世から土地の寄進を受けている。こうしたハティバへの教会組織の進出に関して、ハイメ1世は2つの目的を持っていたと思われる。一方では新たな支配地を迅速に組織するため教会組織の存在に期待したことで、また他方ではカスティーリヤの影響からハティバを隔離する必要があったからと思われる。ハティバはもともと西ゴート王国時代にカルタゴネシス司教区に属しており、13世紀においてなおこの司教区はカスティーリヤに属していた。だから、ハイメ1世としてはこのハティバをバレンシア司教区の管理下に結びつけておこうという思惑があったと思われる。

また、このハティバに修道士を派遣してきたのがドミニコ会やフランシスコ会といった托鉢修道会である。いずれもバレンシアの土地分配記録中に土地を与えた記述があり、こうした托鉢修道会にとって、交通の要衝にあるハティバはバレンシア、ムルシア、グラナダ、カスティーリヤへ続く街道の分岐点として魅力的であったが、同時にその教育活動を見逃すことはできない。

例えばすでにドミニコ会ではムルシア、バレンシア、バルセローナ、そしてチュニスでアラビア語とヘブライ語を学ぶ学校を設置しており、13世紀末以降ハティバでもこうした活動が見られるようになるが、その目的はイスラームやユダヤ教の文献を読める素養を身につけ、教義を理解して彼らに対抗できるようにすることであるという。同時にそうした素養を身につけることは、修道士がユダヤ教徒やムスリムに改宗を勧める説教を行う際にも有用となる。キリスト教徒の共同体が確立されていく中で1263年以降、ムデハルやユダヤ教徒を改宗させようとする試みが行われる。

興味深いのは、ハイメ1世がキリスト教徒とムデハルの役人双方に、説教のために街に来た修道士を歓迎し、ムデハルとユダヤ人が説教に耳を傾けるよう説得するよう要求し、説教を聴くことを拒んだ者は罰すると命じていた点がある。だが、彼は改宗が引き起こす問題点にも気づいていたようであり、イスラームからの改宗者を保護する命令も出しているのである。こうした修道士の活動にもかかわらず、バレンシアでは13世紀に集団改宗が起きたという事例は確認されていない。国王の側には修道士による改宗運動を支援しようとする動きを見せるものの、改宗がもたらす混乱にもある程度の理解があったことが伺えるかと思われる。

しかし、1260年代以降、ハティバのキリスト教徒の共同体が拡大する中で、ハティバの以前の支配者アブー・バクルがなおモンテサで健在であったこと、またハティバのムデハルがグラナダのムスリムとの結びつきを持っているという状況は、ハティバのムデハルに対するキリスト教徒の疑念を深め、キリスト教徒民衆によるムデハル襲撃という事態が発生するようになった。

こうした事例は他にもバレンシア各地で発生するのであるが、実は南部では北部・中部ほどには見られない。これはバレンシア北部・中部に較べればまだハティバを含む南部ではキリスト教徒社会の組織化が進んでいなかったこと、ハティバがハイメ1世の軍の最前線基地の役割を担っていたことがその理由として考えられるかもしれない。

今回の報告では1246年までのハティバ社会の変化は乏しいが、度重なる反乱を契機として都市ハティバが一方では急速な変化を経験することになった一方で、長いタイムスパンでハティバにキリスト教徒を中心とした社会が形成されていった可能性が浮き上がってきた。また同時に、ハイメ一世の行動が改宗を図ろうとするなどキリスト教徒の価値観を色濃く残しながらも、一方で改宗が行われた際に発生する問題点を考慮するなど一定の合理性を持っていたことと、必要とあれば行動原理に変更が加えられていた点も興味深く、この点も今後の検討課題としたい。